

地球 第九卷第二號

昭和三年二月一日

居住地理學の問題としての日本

(下)

住宅(藤田文學士の日本民家史)

小川 琢 治

四

次に宅地に關して問題となるのは其の境界線である。地形圖(五萬乃至二萬分一)若くはそれ以上の大縮尺の平面圖上には此の境界線の形狀が多少明瞭に大體現はれてゐる。地形圖では多くは箇々の宅地の輪廓の區別し難きを常とするも、越中礪波郡の如き規則正しい長方形の孤立住宅の敷地境界線は判然と認められ得べく、又た箇々の宅地の境界線が現はされぬ場合にも、密集家屋の街道村と疎らな家屋を圍繞する農村との對照は頗る著しく、兩者の村落としての性質が明かに圖上に現はれ、居住地理學の地圖學的研究の手掛りとなる。鳥取市東南の雨瀧街道に沿ふた宮ノ下と之と大茅川を隔てた對岸の中郷其の他の諸部落との對照はその好例である。此の村の北に當る宇倍神社は稻葉山の西南麓に在つて、社格は因幡の一の宮として國中の第一位を占め、延喜式名神大社に列する

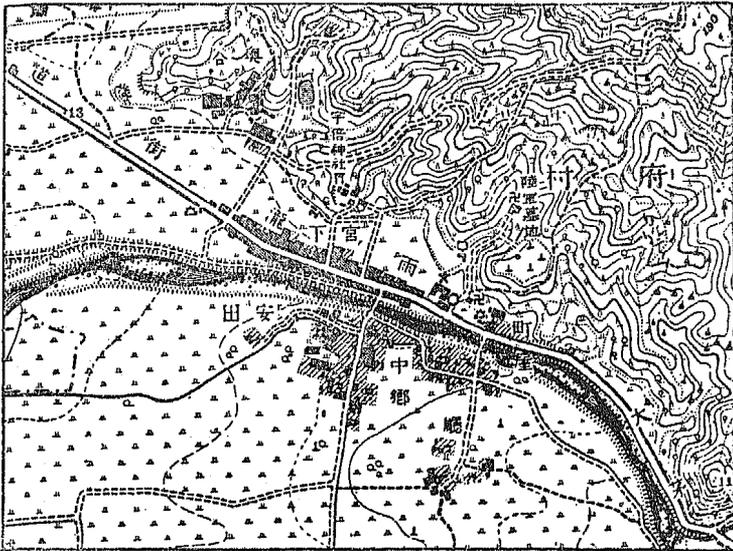
ものであるから、此の街道村は道路の兩側の水田に宇倍神社の鳥居前町として發達したものらしく

特殊の事情の下に起つたと想はれる。

宅地の輪廓は前回述べた面積の大小と同じく地方的地文狀態特に地形の制限の有無により變化するは勿論である。其の好例は同じく茲に掲げた圖の東北隅に在る奥谷村に見られ、此の村落は名詮自稱の通り狭い溪間の處に在つて宅地の建物以外の空地が非常に狭少である。稻葉山の北から西に通ずる山陰線榎峠隧道の西に在る百谷の場合には是よりも更に明瞭に此の關係が認められる。

比較的急峻なる山地又は丘陵地に沿ふた海岸の狹隘なる平地に發達した村落も亦た溪間と同じく空地に乏しい宅地より成るを常とし、此の如き狭岸平地の居住の狀況は日本到る處に見られ、その好例は明石海峡の海岸鹽屋明石間に於て未だ避寒及び避暑の流行して別荘が軒を並べて建てられる以前の古い二萬分一地形圖に既に認められ又た

第一圖



その對岸の淡路の側にも認められる。此の場合は漁村なるが爲めに耕地に乏しい處に發達し得るのは勿論である。

之に反して關東平野の畑地の多い海拔百尺内外の高臺では五千分一東京近傍地形圖の下練馬圖幅宿村に見る如く、今尙ほ川越街道に沿ふた兩側の民家宅地が幅廣き敷地を有するのは上に述べた兩者と反襯する一好例で、宅地面積の地形と如何に密接の關係あるかを觀るに足る。

宅地の境界は越中の孤立莊宅(藤田君のカニヨ式住宅)に在つては長方形を成した敷地の周邊に杉の立木を繞らし、森林中に開いた原始的住宅の名残たるを示すと思はれる。此の如く明かなる限界は宅地の聚合した處では多くは判然たらぬが、濃尾平野の村落の如く今尙ほ杉を主要なる宅地内の樹木とする遺俗があるのを見れば、前回に述べた如く農村成立當初の地文狀態が窺はれる譯である。

境界に溝を穿ち垣を環らして限界を劃定するは聚合した場合に必ず行はれるが、宅地と之に連接する畑地の在る場合にはその區劃の判然たらぬ様な場合がある。故に地形圖に示された宅地の境界の如きも往々之に接する水田との境界たる以外の意義なきものがあると想はれる。

宅地の境界に堀を穿ち築地をかき上げた完全なるものは藤田君は古く之を垣内カイトと呼んだと考へられた。同君は環らした樹木を鎮守の森に比較すると同時に、此の如き境界の並樹又は林地帶ヒキロギを神籬ヒキロギに比較され、此の境界内が垣内であつて宅地を意味すると考へられた。若し此の考説が正しいならば我々の嘗て奈良地方の條里制の行はれた地方村落に見る堀を環らした垣内式村落なる名稱は或は

その儘使用するのは妥當でないかも知れぬ。

藤田君は近江國伊香郡吉田村の吉田近江の住宅の平面圖(第五一七頁)を掲げ、藪敷と稱する竹藪をめぐらし、その内外兩邊に堀を穿つた面白い例を示され、その敷地總坪數約八百坪に達するといふ。是は略ぼ一町歩の面積の四分之一(九百坪)に相當し、越中の孤立莊宅の最も大なるものにも之に達するものがあるといふ。

然れども宅地の境界に堀築地を設くる風習が邸宅から垣内式村落へ流傳したかは疑はしく、寧ろ王朝貴紳の別墅などに郷豪が僭上摸倣したものかも知れぬ。我々は奈良京附近の條里遺跡の村落に見る所の垣内を圍む堀が隋唐時代の築障の法に起源するに反し、大莊宅の堀は遙かに後れて生じた風習であらうと思ふものである。

五

次に宅地の内に造られる家屋の平面及び豎面の形狀は現在の都市又は大村落に於ては多種多様である上に、何れの田舎にも新らしい様式の建物が盛んに侵入しつゝあるから、漫然一瞥したのでは容易に地方的特色が識別され難く、將來は倍々困難となり不可能となる傾向がある。此の變化も亦た宅地面積の減少と趨勢を同じくし且つ一層急激である。故に日本民家の研究が今日に起つたのは尙ほ時に及んだ緊急の事業として歓迎せざるを得ぬ。

本書の記載に當り先にした屋根と之に續く間取りその他の家作は互に關係するもので、屋根の簡單なるものと複雑なるものとは直接に家屋の間取り及び平面圖上の形狀と關聯してゐる。故に屋根

の最も簡單なるものから歴覽することにする。

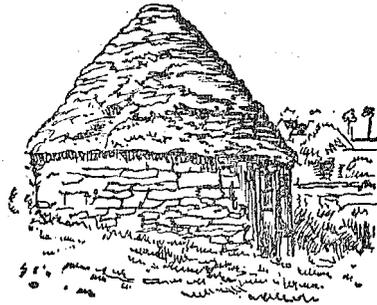
建築物の中で一番簡單な場合は支那語の庾であつて、説文(第九尸部)に『庾水漕倉也 一曰倉無屋者也』といふ。段玉裁の注に之を『無屋無上覆者也』と解し詩經小雅楚茨の『我倉既盈、我庾維億』の毛傳『露積曰庾』といひ、胡廣漢官解詁の『在邑曰倉、在野曰庾』といふを引いてゐるが、若しこの説文の第二の解釋を信するならば無蓋貨車に比すべき無蓋倉庫があつた譯になる。然れども是は恐らくは穀物を短時間積んで置く間に周邊に飛散せぬ爲めに造るものに過ぎぬかも知れぬから除外すべきである。

平面の輪廓に於て圓形で、その上に圓筒狀の壁と圓錐形の屋根とから成つた構造が最も簡單な家の様式である。材料の上からも構造の上からもその最第一は北米加奈陀の北岸及び嶋嶼に住むエスキモー族の造る冬籠りの雪屋 Snow House である。凝結した雪の氷塊を適當な大きさの煉瓦の如く積み重ねて上に天窓を残して出入の口ともなる。

之に次ぐものは中亞から北亞の間に散布する游牧民族の造る天幕假屋で、シベリアでは之をも木材を積んだログハウス Log-houses と共にユルト Yurts と呼び、支那人は蒙古包モンゴクパオと呼ぶ。共に戎氈を圓く巻いて、その上を綱で縛つた圓屋で、横に入口があり上に天窓がある。此もエスキモーの雪屋と同じく屋根と側壁の區別がない。

此等よりも稍手数のかゝつた永久的性質を持つものは今佛國中央高原の西南に當るユヌ Causse 地方の石灰岩の板石が得られる地方に残存する『石の圓小屋』Cabane ronde de pierre と呼ぶもの

第二圖



である。此の形状が原始的住宅の名残りたるべきは、プリユス氏の執筆にかゝる佛蘭西國史(第一卷、第十四章)に擧げた如く、有名なる先史時代建築と構造の近似するもので、之に類似するものがバレアル嶋のタラヨツ Talayots サルデニア嶋のヌラグ Nouvages、南伊太利のオトランド(長靴の踵端に當る處)の地方のスペッキ Specchie 等に認められ、且つ現今ミノルカ嶋でバラカス Barracas といひセーヌ盆地東邊のプイユ地帯のトルリ Trulli といふものにも似た形状があるとのことである。

第三圖



プリユス氏の示せる圓小屋の見取圖には石の屋根が圓味を帯び、支那に在る雁塔や喇嘛塔の或るものに類似し、回教徒の造るミナレットなども全く縁なしと言ひ難く、東西に廣く分布した形式たるは疑なく、或は同一の原始的建築の様式が地中海から西亞及び南亞に互る地域に遠い過去に行はれ、今見るものに共通の起源が有るのでないかとも疑はれる。

支那では圓い倉を囷といふこと周禮考工記、詩經魏風伐檀國語吳語、荀子榮辱篇等に見えて、説文(卷六)には之を解して『廩之圓者、圓謂之囷、方謂之京』といひ、その行はれた

時代が非常に古く、藤田君の引いた和名抄居室(卷十)の倉廩に『萬呂久良』といふ和訓が當つてゐる。同君のいはれた如く此の形狀の倉は日本には見當らぬ様であるが、北支那には今も現存するものらしく、嘗て内蒙古旅行の時に口外(古北口の北承德府管内)で圓い穀倉を目撃したことがある。

六朝を下らぬ古墳出土品中に綠釉をかけた陶圓の模型が此の頃時々日本にも傳來し、現に京都博物館大谷光瑞師の將來品中にその一がある。是から推せば圓倉は支那の古代に近代よりも更に一般に行はれたものと想はれる。その構造は蒙古包の天窓に當る處に圓孔を設け、梯子をかけて其處から穀物を流し込むのである。後漢劉歆釋名の釋宮室の部に『廩矜也、寶物可矜惜者、投之於其中也』といふ文に投の字を用ゐたのを觀れば圓廩共に天窓に當る孔から投げ込むものであつたらしい。

尙ほ劉氏は『困縶也、藏物縶縶束縛之也』と解してゐるが、是は困が卷きつけて縛る意味の動詞から導かれた語なるを示すもので、前に述べた蒙古包の造り方と同一なるは偶然の一致に非ずして語源を溯る一つの手掛りであると思はれる。

此の如く困といふ圓小屋は圓倉に過ぎずして、住宅そのものではない。然るに尙ほ此の外に藤田君の言及せなんだ住家たる圓小屋が少くも古代支那にはあつた筈で、それは蒲又は庵又は栢菴と呼ばれてゐる。その前の二者は同じく釋名に出で、

草圓屋曰蒲、蒲敷也、總其上而敷下也、又謂之庵、庵菴也、所以自覆菴也

といひ、畢沅の疏證に禮記喪服四制に鄭玄の高宗諒闇の注を引いた『闇謂慮也』といふ語を根據として庵と闇とを同義と解し、廣韻に『小草舍也』といひ、集韻に『圓屋爲庵』といひ、庵の古義の草菴

圓小屋の名稱たるに疑を容れる餘地がない。

康熙字典の庵の字の注には杜佑通典を引いて、北周武帝の北齊を攻めて退却するに當り齊人が誤つて栢菴を帳幕として周軍の去つたのを覺らなんだので追躡し能はなんだといひ、栢菴を天幕と見誤つたといふ事もある。是から察すれば劉氏の蒲と庵との二語としたものが此には栢菴なる一語となつたらしく、此の栢は殷都の亳を薄、薄姑、蒲姑と綴る例から考へて薄、蒲、縛に通用すべく、劉氏の二語に分つて各別の意義を與へたに過ぎないかと想はれる。

中村(新太郎)教授の話によれば朝鮮で小屋をマクといふことで、蒲薄幕と通音の語が今も半嶋で小屋を意味するとせば、原始的圓小屋の名稱は一方では庵となり、一方では幕となつて殘存するらしく、蒲庵又は栢庵がその最も古い語であつたと推衍し得るのである。

先秦地名の語義が準噶利語即ち東土耳其格語での明かなることは先秦時代の塞外民族(内藤博士紀念支那學論叢)を研究するに當つて發見した事實で、昨年末に穆天子傳(目下印刷中の狩野博士紀念支那學論叢)を研究するに及び穆王の八駿の名が同じく土耳其格語から意義を推知するを得た。今このバク又はマク(幕、栢、蒲)及びアン又はアマ(庵)に相當する土耳其格語を求むるに、現今の縛るる語は Baglamak (= binden, Verbinden) 倉るる語は Ambar (= Speicher) である。是から推せば栢庵は古い西北方語の縛つた圓小屋といふ意義のものが北周頃まで行はれたのでないかと想像し得られる。我々は土耳其格語の智識に乏しいが、圓小屋及び圓倉の語源はアルタイ山麓から東亞に波及し、夏殷周三民族の來東の頃まで溯らねば眞の語源が明かならぬものと信ずる。

之を要するに困といひ幕といひ庵といひ又は蒲庵といふ圓倉及び圓小屋は草原地方の游牧民族の棲息する天幕と形状の類似するに止らずして、起源の同一なるを想はしむる理由も相當に有力である。

六

次に簡單なる家屋の形状は寡雨の地方に行はれる平屋根 Flat-roof である。その最も原始的構造はアラビア東岸サビヤ Sabiyah でアリーシュ Arësh と呼ぶ椰子の葉に粘土を捏ねつけた小屋で之に置いた平屋根と共に椎萱狀を呈し、エウフラテス河畔ではその屋根に蘆葦の席を用ゐるといふ日本の如き多雨の氣候の土地には此の如き構造は建築術の幼稚な時代に成立し得ないが、北支那の如く八九月間の短時季以外常に乾燥せる地方では絶無でないらしい。我々の明治三十五年初めて北支那に旅行した時に、和田(維四郎)先生に隨伴して白河々口から解船ボートに乗つて塘口トウコウまで溯航するに當り、九十九折して百に一つだけ足らぬから白河といふどの羊腸たる流路に沿ひ兩岸處々で殆んど全く屋根の勾配のない假屋の如き民家を見て驚いた印象は今も尙ほ残つてゐる。藤田君は此の如き勾配の極めて緩慢な屋根を Pultach (Lean-to roof) 即ち平屋根の一種と看做し、之を片流と呼んだ。同君は山西大同府附近の寒村に此の種の屋根の天干煉瓦の四壁の上に細い木枝と高粱稈カオトシイコウラとを置き四五寸の土を載せて出來たのを踏られたといふ。

藤田君は此の種の屋根の支那名を漏らされたが、是は太平御覽(卷一八一)居處部九の末に屠蘇と呼ぶものらしく、この項に引用した

通俗文曰屋平曰屠蘇

廣雅曰屠蘇庵也

魏略曰季勝爲河南尹、廳事前屠蘇壞、令人治之

といふ語により、その平屋根の小屋たることが知れる故に我々は平屋根及び片流れを含む一種の形式として屠蘇(康熙字典には屠蘇に作る)を擧げてよいと信ずる。但し廣雅に屠蘇は庵なりといふも此の場合には恐らくはその原形の圓い平面の輪廓の尖はれて少くも四本の柱か四壁に支へられた方形又は長方形の小屋に相違あるまい。

之と類似した屋根の造り方は招造で、片流の上邊に反對の傾斜の狭い屋根を添へたものである。此の兩者は大工の建築工事中の仕事場とか田舎の小屋、便所などには用ゐられてゐるが、住家には見ない形式で、その幾つも並行した鋸齒屋根 *Säge-dach* は近頃工場の屋根として輸入された。

次に規則正しい形状は正方形の底面を有する方錐屋根 *Pyramid roof* で、是れも亦た庭園の四阿屋とか寺院の堂宇に往々見るが、住家には殆んど用ゐられぬものである。

日本民家の簡單な形状は長方形の平面輪廓を成し、棟がその長邊の方向に延び、屋根がその兩側に同じ勾配を以つて傾いた構造を成すものである。而して棟が全長に亙るもの即ち切妻 *Gable roof* (*Sattel-dach*) と呼ぶものが最も簡單で、その一端に戸口が設けられた妻入りとなつた、出雲大社造の神殿から推してその起源も亦た最も古かるべく、之に反して戸口が屋根の下に設けられた平入りのを神明造と呼び、前者から導かれて便利な形式に變つたものと察せられる。

切妻妻入家屋の著しい例は瑞西の農家シャレー Chalet である。日本にも飛信山間に見當るのは蓋し偶然の一致に過ぎざるべく、藤田君の注意された如く南洋土人の家屋と共通のものど考へるのが妥當と信ずる。此の如き切妻妻入の大家屋にその前面の屋端の搏風板ハフに往々手のかゝつた彫刻のある信州などの例は或はその一證となるかも知れぬ。

此の形式の住家は瀬戸内海沿岸の町村に往々見受けるのみならず、和泉の紀州街道に當る信達の一村落盡く街道と直角の棟を並べた如き著しいのが残つてゐる。然れども多くの場合は他の形式の住家の傍に土藏や物置等だけが此の形式を存するを普通とする。

招造と切妻との中間に位する屋根は本誌五巻の表紙に色刷で示した佛西兩國境の山間にゐるバスク族の家屋で、兩側の屋根が非對稱的で、入口の妻入になつた點が著しい特色である。而して此の形式の屋根はその現在住地から遙かに北方及び東方に廣がつてゐるのが頗る面白く今山間に逐ひ込まれた民族の古く分布した範圍を察する手掛りとなる。是は恐らくは日本の何處にもないと思はれる。同じく切妻でも平入の方が更に多く現存し奈良京都等には市街と並行する割長屋式の住家多く、而して此の場合には兩隣の屋根の境界に卯建と稱する防火壁の上端が土塀の如く突出するのがある。但し京都では僅かに西陣方面に残存するものを藤田君が発見されたのである。

第三の普通なる形式は寄棟造即ち四阿ヤンナ Hip-roof (Walmdach) である。是は棟が長邊の長さより短く、その兩端から、兩側と略ぼ同じ勾配の屋根が短邊に向ひ下りるもので、堂宇民家に頗る多く有り、吾妻家といへその分布は九州中國にまで及び、近畿地方にも近江などには處々に發見され

る。

藤田君は『天平時代に輸入された唐代建築の殿堂の風であつて、平安朝には公家の寢殿作りであつたのであるから、それが我國の全體に分布するといふことは當然の現象である』とし、又た半嶋歸化人の居た近江及び駿河以東の分布と關係して大陸移住者の家屋の形式でないかともいはれた。今按ずるに四阿の屋根は朝鮮半嶋の草葺農家の形式として最も普通で、彼に在つては勾配が極めて鈍く且つ棟の部分も無造作に草に覆はれたゞけで、日本の四阿の如く判然と四邊の屋根と區別して造らぬ。故に日本に来て半嶋農家の構造が變化したもので、特に雨量の多い關係で勾配を急にし且つ棟の部分にも注意を拂つのでないかと考へ得るのである。大陸の大建築を摸倣した堂宇寢殿との構造の共有なるはその起源が前者と共に大陸にある爲めで、日本に後者の入つた影響とは考へ難く見える。

切妻妻入りの家屋から變化したと想はるゝものは片入母屋及び入母屋である。是は切妻家の一端又は兩端に流れ *Teah-to* を附けたもので、形態上四阿と切妻との間の子である。而してこの形の住家の妻入りを『まや』、平入りを『よこや』といひ、妻入が原型なるを想はしめる。

單一の棟を有する此の三種の構造より一層複雑なるは棟がT又はLの字形になつた『つのや』で、この母屋から突出した支棟は或は厩となり、或は居間となつて、屋内の間取りも平面の輪廓と共に變つて來る。九州には此の構から更に分岐した『工等』の『くゞ造り』及び『かゞや建』と呼ぶものがある。

屋根の傾斜が一平面を、成さずして折れて將棋の駒形になる場合はルキ十四世の時の建築家マンサル Mansard の名に因んでマンサルド Mansarde と呼ぶもので、西洋建築に見る所であるが日本の郷豪の大厦には時として此の形式の屋根も發見され北河内に珍らしくないといふ。藤田君は此のマンサルド風の腰折造を臺棟造として區別された。

藤田君は此等の屋根の形式を記載し、更に進んでその間取りに就いて精細に記載し、妻入住宅の首に傘建カラカサダテを置き、爾雅釋宮に西南隅を奥といひ、西北隅を屋漏といひ、東北隅を宦イといひ、東南隅を突といふとの文に比較し、中央に心の柱ある大社造り及び之に類する民家の間取りに及び、日本民家の間取りが唐代の法制に基くか又は更に古い時代からの傳統なるべきを結論された。

以上述べた所は浩瀚なる本書の紹介を兼ねて想ひ着いた點を列擧したるに止り、著者の詳細を極めた記載中の一部分に就いて要點と信ずる部分を抜き出して私見を加へたのである。此の概観により我々は日本民家の形態が單に生治の必要から生じたもののみでなく、或る地方に特有の原始的形態の殘存すること、その形態の特色に大陸からの入住者の傳來した所が少なからず含まるゝことを見るに足り、人文地理學上更に深く博く研究すべき問題も亦た頗る多きことが明かとなり、又た此の研究は國史研究者に文獻以外に現存する特種の材料を供給する意義をも有するべきも亦た明かとなつたと信せらる。

我々は本書に擧げた民家の諸型式が如何に分布するやに就き、更に完全精密なる地圖を作るまで未だ研究が進んでぬと想ふが、住宅問題は國民の實生活に最も重大なる關係を有するものであ

るから、その基礎として尙ほ精密廣汎なる研究を完成せねばならぬ筈である。我々は藤田學士の握られた鍵により開かれた寶庫から續々未知の資料が取り出されて居住地理學の生面が次第に展開するを期待して暫く本稿を結ぶ。

静岡縣掛川町近傍の地質に就きて (二)

槇 山 次 郎

掛川統と堀之内統の關係　すでに幾度か繰り返し兩層は全然整合である事を述べた。しからば兩者は何故に分つか。元來掛川統は掛川森間に發達する大日砂岩以上結縁寺泥岩までの整然たる一層群で沈積の一輪廻を完くしゐるもので其基磐は大井川層の岩石よりなる比較的平に緩なる表面である。然るに其南東の延長は下に此標準下底以下の厚い砂泥互層が來る。堀之内統は特別なる凹所に沈積したる一地方的の層群で掛川以西には全く缺けてゐる。故に兩者は掛川以南では一連の地層ではあるが全體に普遍せしめ得ぬ。當然分類されねばならぬ。其分界は此金谷凹所の始まる線であればよい。しかし標式掛川統は海が西より東へ浸入した沈積で東へ多少覆蔽してをり其最古いものを西端に見る。即ち掛川以南の地に於ける兩統の總和なる層群より此西端に現はるる水平線以上に相當する者を引算した残りを堀之内統とすればよい。嚴密なる分界はとうしても人爲的になる。最判り易